

自分で「選ぶ」ということ

特定非営利活動法人 ゆめ

竹上 道邦 (元 特別支援学級担任)

放課後デイ「ゆめクラブ」では、休業日、子どもたちと一緒に買い物に行き、昼ごはんを作って食べています。メニューを相談して、何をかうか決め、子どもたちは買い物に行きます。



レタスとミニトマトをかう係になっていた知的障害も重い自閉症のAさんが、スーパーの惣菜コーナーで、からあげを取り上げ、「違うよ!」「ダメだよ!」と言うと、大声で泣いて、パニックになって指導員が困ってしまうということがありました。



どうしたらよかったのか これからどうするのか 指導員で実践検討をしました。

話し言葉のないAさんの思い・願いは? 実践は? と考え合いました。

・すぐ覚えるが、パターンを覚えると融通がきかない。決めたことは理解させないといけない。何でも買えると思ってしまうたら、変更が難しくなるのではないか。

- ・何をかうのか わかっていたのだろうか?
- ・ことばは本当に理解していたのだろうか? 視覚的な援助が必要ではないか。
- ・物の名前は理解できている。「どっち?」ということば、「選ぶ」ということは理解しているのだろうか?
- ・指さして、「どっちをかう?」と選ばせていたが、これが買いたいと選んでいたのだろうか?
- ・他の子どもたちが、惣菜を買っていたので、自分も買いたいと思っていたのじゃないか。「憧れ」「自分もしたい」という思いは大事にしてあげたい。

させられることが多い子どもたちにとって、放課後の生活では、子ども自身が決めることを大事に取り組みたいと、私たちは考えてきました。

自分の生活を自分で決め、楽しめること。選ぶということは、自立の第一歩。生活の主体者を育てることになると考えるからです。でも、もう少し、その中身を深めたいと思いました。

自己選択が大事と言われるが、「選ばせれば、それでいい」のではないと思います。

子どもたちがしたくないことを提示し、選びなさい。「選びたくない」「どっちもいや」ということだっています。選んだんからと無理やりさせられることになってしまったら、子どもたちは、自分から選ばなくなってしまいます。

「自分で選ぶ」ということは、「あれもしたいなあ」「これもいいなあ」という要求があつて、「どうしようかな」と迷って、自分で決める。それが主人公、権利の主体を育てることではないでしょうか。今の障害児者をめぐる状況は、なかなか選べない。現状にどう合わせるかと、障害者権利条約の理念とは程遠い現状がまだまだあります。だからこそ、要求を大事に育てたいと思います。

「今日は、どの公園に遊びに行こうか?」

子どもたちは嬉しそうに行きたい公園の写真を指さして、指導員に笑顔を向けてきます。

「ここ、行きたいんやね」

